

# F U E K I

〔特集〕「ここに生きる、ここで創る」  
—地域の明日のつくりかた—



## 特集

ここに生きる、ここで創る

福武教育文化振興財団フォーラム  
vol.4



福武教育文化振興財団では、文化・芸術を取り入れて創造的な地域づくりを目指す活動を応援しています。その一環として毎年「ここに生きる、ここで創る」をテーマに、フォーラムを開催しています。

第4回となる今回は、地域資源を掘り起しながら、そこに住む若者やアーティスト・経営者たちと共に新たな文化創造や仕事づくりで地域の再生を仕掛けている西粟倉・森の学校代表取締役・牧大介氏、NPO法人タブララサ理事長・河上直美氏、瀬戸内市地域おこし協力隊・浅井克俊氏、うのづくり実行委員長・森美樹氏を迎え、「地域の明日のつくりかた」について語り合っていただきました。(1月12日、Junko Fukutake Hallにて)

### ★物事の発想

**河上**—タブララサには「何にもとらわれない」という意味も含まれていて、立ち上げた人にもとらわれる必要はないという形で受け継いでいることが一番の宝物。そういう渡し方をしてくれた前任者、立ち上げた初代に感謝しています。みんなフルタイムで仕事を持ちながら、自分の興味や能力を発揮する場、夢の実現や自己実現の場にタブララサを使っています。

ミーティングと言う名の妄想、雑談の中から面白いもの

を拾い上げて、実現するにはどうしたらいいかということを考えていきます。課題解決がありきではなく、次は何をしたいかを大切にしています。

**浅井**—素材をどういうふうにデザインするか、どう宣伝するか、企画の考え方というのは東京のタワーレコードで働いていた時代と大きく変わらないです。東京では音楽が素材でしたけど、岡山ではママカリなど地域資源が素材になっています。

**森**—宇野に住んで3年目の頃、地域の知り合いもそれなりに増え、自分の中でも町に何か持ってきたらいいなと思っています。

単純に、自分で面白そうというのが何かを始める一步、原動力かなと思います。

**牧**—個人では、十分なお客さんを獲得することは厳しいかもしれませんけど、集団で束にして見せていくと、この地域はちょっと違うよと思えてきます。AKB48も単独ではタレントとしてうまくいかない人たちを集めてグループにして、プロデュースしてきたという経緯を聞いています。そういうところからスタートしていくと、ある程度突き抜けていくと、逆にグループのブランドより個人のブランドが上り卒業していく、またフレッシュな人が入ってきてグループのブランドが守れるところがあると思います。

挑戦者を集団として見せていくというのが、地域のブ

ンディング上、有効だと思っています。そういう見せ方を意識しているという感じです。

### ★続けること

**河上**—若いからいつも元気ですねとか、いつも楽しそうにやっていますねとよく言われますが、ボランティアで活動をしているのでモチベーションや若いメンバーが多いので人生の岐路やライフスタイルがチェンジする場面が多いので、内部ではそういう課題はずっと持っています。

どうしたら団体を維持していくのかを考えのですが、結局最後は、私自身がこの団体をどうしていきたいのか、みんなと一緒に何をやっていきたいのか、熱意、愛情があれば伝わるのだなというところにいき着きました。

**浅井**—生業として成立しないと持続していくのは難しいと思っています。自分の半径5メートル以内の範囲だったり、暮らしている地域に対して、より暮らし良くなるような…趣味と実益を兼ねた生業であれば、一番続くかなと思っていてチャレンジ中です。

**森**—人に恵まれているから続けられている部分がすごくあると改めて実感をしているところです。地域に住んでいる方々に支えていただき、外から来た方々には新しい刺激をもらい、一緒にやっているうちに楽しい思いをさせていただいて、人と人がつながって広がって盛り上がっていく、今

はいい循環というかサイクルが回り始めているのを感じています。

**牧**—森というのは、植えてから収穫するまで、80年とか100年かかるので、それを相手にして経済を立て直していくということですから、「5年10年で結果を出します」と言うのは嘘っぽくて、「50年がかりのプロジェクトです」と言う方が説得力があります。

20、30代の人たちは50年というのはギリギリ生きているうちに見られるかもしれない、ほどほどにリアリティがあります。そこまでやり続けることができれば、さすがにそれは成果が出せるのではないかと思っています。50年がかりでやり続けた地域はないよね、逆にできるよねと、そういうふうに夢が膨らむところもあるって、それが短期決戦ですというと、そもそも成立しないプロジェクトです。地域づくりというのは、10年かけて1合目を上がるとか、何とか続けていけるかなという話で、何か結果ができるのを10年というスパンで考えざるを得ません。

### ★物事の進め方・考え方

**浅井**—僕は基本的に何もできないです。自分で編集できないし、デザインもできないけど、そこが自分の一番いいところかなと思っています。できないので、誰かできる人をみつけてきます。その代わり、こんな面白いアイデアがあると



Photo:Daiuke Aochi

話してその気になれます。

会社でも地域でも同じですが、できない理由ではなくて、できる方法を考えていくというのが一番早いし、一番実現できる最短コースだと思っています。

森——その気にならうというのは、すごく大切なことだと思います。私の場合は、話をしながら、一緒に進めていくような状況を作り、お互いの折衷どころで物事を進めていくことが多いです。

河上——定期的に西川でマーケットを開催しているのですが、こういう活動で食べていくことは必要だねっていう人が集まって「いち」という会社をつくりました。会社ですと名刺を差し出すと、そこからの話は仕事として話すことができます。それはすごくやりやすいし、このことで対価をいただけます。そういうその喜びは、NPOでは感じることはできなかったことです。

団体の状況が求めているものが、お金なのか時間なのか、そういうところを見極めることは大切だと考えています。

牧——結果が積み上がってくると、自分の手法で進めていますが、見えない時はたくさんの人へ応援してもらうやうでやるしかないという感じです。森の学校を始めて、自分でやるということ、誰かに対して提案するのは全く違うことがわかりました。

### ★これからのこと

森——一歩ずつ着実に進んでいけるような活動を町に寄り添いながら続けていくと、町の形に合った“うのづくり”になっていくと思います。ようやくちょっと俯瞰して見えてきたというを感じていて、今俯瞰できるものをまた次のステップに活かせていけたらと思っています。

浅井——地域の資源を探してそれを広告していくコホレジヤパンを日本一の地域広告会社にすることです。いくつか拠点を持ちながら、仕事の幅と地域の交流人口を増やせたらいいなと思っています。

河上——タプララサは、ある程度ルールはあるにしても面白いことだったら何でもできる場ですよというのを守って、ワクワク感を維持するのが私の役割かなと思っています。

牧——土壤形成は十分できているし、自分がやることはないと実感しているので、区切りのつけ方、何らかの区切りをつけることを考えています。そこにいる必要があるかないかは、自分で自分を判断することだと思っています。

地域の文化力が問われている時代において、地域資源を生かしながら、新たな文化的価値を付け加え、創造(つくりだす)することが不可欠です。そして、その実

現のためには、それまでの地域の歴史や風習といったものを大切にしながら、人やエリアを超えて地域をつなぎ、ときには必要なお金を引っ張ってくるといった役割をする人が必要なのではないでしょうか。調べて、知って、企画して、仲間をつくり、仲間を広げ、地域を巻き込み、ファンを育てていく……。

こうしたプロデューサー(リーダー)たちが次々に現れ、地域の抱える課題を解決していく力になれば、地域の明日は、今日よりもきっと明るく、より良いものになると思うのです。今回のセッションで、そんな思いと期待を抱くことができました。(コーディネーター／山川)



## 牧 大介 Daisuke Maki

株式会社西粟倉・森の学校 代表取締役校長

1974年、京都府出身。京都大学大学院(森林生態学研究室)修了後、三和総合研究所(現在 三菱UFJリサーチ&コンサルティング)を経て2005年アミタ持続可能経済研究所を設立し所長に就任。主に農山漁村における新規事業の企画・プロデュースを手掛ける。2009年2月に(株)トビムシ設立に参画し取締役就任。2009年10月に岡山県西粟倉村において地域商社である(株)西粟倉・森の学校を村役場と(株)トビムシの共同出資により設立し代表取締役に就任。

## 河上 直美 Naomi Kawakami

NPO 法人タプララサ 理事長

岡山市出身。9年間の旅行会社勤務を経て、2004年よりNPO法人タプララサに関わる。2007年より理事長。20～30代を中心としたエコの要素を取り入れた街づくりに取り組み、主な活動場所は岡山市内の西川緑道公園エリア。キャンドルナイトの主催、有機生活マーケットいちの運営、飲み歩きイベントハレノミーノや満月BARの協力をしている。いち実行委員会、共同代表・環境省3Rマイスター、岡山市環境総合審議委員、岡山県生涯学習審議委員。

## 浅井 克俊 Katsutoshi Asai

瀬戸内市地域おこし協力隊 ココホレジヤパン 代表取締役・プロデューサー

横浜市出身。2003年タワーレコードに入社。ブランドマネジメント、キャンペーンの企画制作、タイアップ、ライブイベントの企画運営などに携わる。販促企画部部長、ライブ事業部部長を経て、2012年9月に退社。同年10月より瀬戸内市地域おこし協力隊として活動する傍ら、2013年「地域の魅力を広告する会社」ココホレジヤパン設立。古民家再生や地域のPR、ままヨビ(ままでかりのアンチヨビフレ風)の開発や特産品のプロデュースなどをを行う。

## 森 美樹 Miki Mori

うのづくり実行委員会 委員長／ガラス作家

広島県出身。倉敷芸術科学大学でガラス工芸を学んだ後、2007年、共同アトリエ「駅東創庫」に出会い宇野へ移住。2011年から、若手クリエイターを呼び込むとする移住プロジェクトにてクリエイターの移住「職住遊」のサポートを行う。これまでに22組44名の移住をお手伝いする。宇野港で開催の「UNOICHI～海が見える港のマルシェ～」に協力。

## 山川 隆之 Takayuki Yamakawa

編集者／吉備人出版 代表

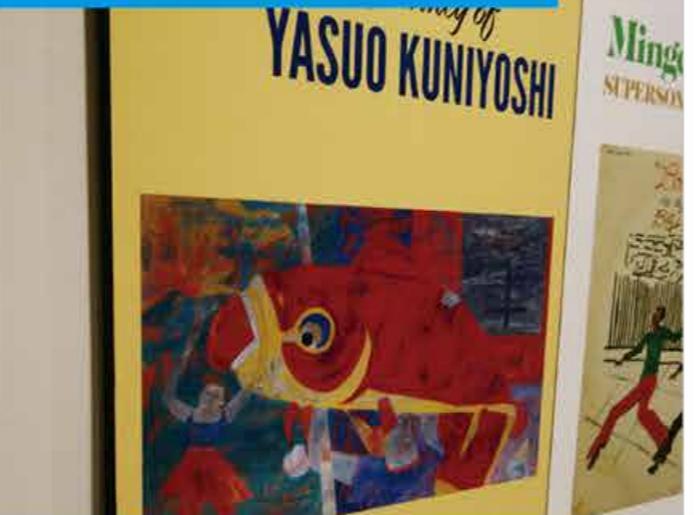
1955年岡山市出身。「本づくりはまちづくり」を掲げ、これまでに約530点を出版。日本出版学会会員、岡山ベンククラブ会員、NPO法人アートファーム理事。2012年福武文化賞奨励賞受賞、2013年度岡山市文化奨励賞(学術部門)受賞。

### [協力]

寺田真紀夫(ristorante Terada)／有機生活マーケットいち／佳豊庵／NPO法人タプララサ／杉浦慶太／シネマニワ／英田上山達歩団(1000人達歩実行委員会)／木工房ようび／西粟倉・森の学校



## アメリカでKUNIYOSHIを観た スミソニアン美術館で回顧展 一福武コレクションも出展一



20世紀前半のアメリカを代表する画家として活躍した岡山出身の画家・国吉康雄の回顧展「The Artistic Journey of Yasuo Kuniyoshi」が、アメリカ・ワシントンDCのスミソニアン・アメリカン・アートミュージアムで2015年4月3日より8月30日まで開催されています。アメリカでの国吉の大規模な回顧展としては1948年以来で、国内外の美術館・コレクターからレベルの高い作品が厳選され、福武コレクション(福武總一郎理事長個人所有)も15点出展されています。この大回顧展で改めて、国吉の再評価が高まることが期待されています。(小川隆正)

## 輝き、息遣い 厳選された展示作品に魅了

回顧展開会前夜の4月2日、オープニングレセプションは、美術館関係者、駐米日本大使らが招待され盛大に開催されました。日本からは、最大の貸出元でもある福武理事長をはじめ、岡山商工会議所・岡山経済同友会共催の視察団も招かれました。

国吉展を企画したトム・ウルフ氏(バード大学教授)、ジョアン・モーザー氏(スミソニアン・アメリカン・アートミュージアム シニアキュレーター)によるプライベートツアーで、展示作品(油彩・カゼイン45点、ドローイング21点)を鑑賞しました。図録等で馴染みのある作品でも、本当に光輝くほど美しく、身近でみると、タッチから国吉の息遣いが聞こえそうと思えるほどでした。

国吉作品は、よく暗いとか重たいとか、作品の第一印象から言われることが多いのですが、厳選されたこれらの展示作品はどれも素晴らしい、国吉作品が本来持つ魅力を存分に感じることができました。

I	II
III	IV
V	VI
VII	VIII

- I. スミソニアン・アメリカン・アートミュージアム II. 関連企画のアーカイブ展示 III. 講義中の国吉の写真 IV. 館内の表示 V. 本展覧会を企画したトム・ウルフ氏とジョアン・モーザー氏から説明を受ける視察団 VI. 国吉が講義をしていたアーツチューデンツリーグのスタジオ VII. レセプションでスピーチをする福武理事長 VIII. 福武理事長と日本からの視察団

その後、ニューヨークに移動し、国吉が生徒としても、教師としても在籍した「アーツチューデンツリーグ」を見学しました。ここはいわゆる美術「学校」ではなく、安い授業料でいつでも入学でき、いつでも辞めることができる等自由で自主的な運営による「リーグ」で、今も年間延べ5000名の生徒が学んでいます。建物は国吉の時代から変わらず現存し、国吉が使っていたスタジオもそのまま残っていました。

ここでの講義中の国吉の写真は、本当に自信に満ちて堂々としていて、日本人の我々には大変誇らしく思えます。日米開戦時に収容所へ敵国人である国吉先生が召喚されぬよう、教師・生徒らが大統領へあてた署名入りの嘆願書も残っていました。亡くなるまで20年間に渡り人望厚く信頼されていた教師の側面をみることができました。

国吉は、政治家を始め様々な人々に働きかけ、全米美術家組合を自ら組織化し、初代会長につくなど、リーダーシップを発揮する姿も浮かびあがってきました。

今回の視察団からは、あまり知らなかった国吉康雄が、これほど偉大な画家として大成し、米国で活躍していた事実を初めて知ったという声が多くあがりました。

17歳で岡山市から単身渡米し、苦労の末一流の画家となった彼の作品や業績を一人でも多くの方々に知っていただき、そうすることで、作品の持つメッセージや彼の生きざまから観る人に多くの示唆を与えられることになるのではと改めて強く感じました。

### お知らせ

ワシントンD.Cで開催中の国吉康雄回顧展鑑賞およびニューヨークで国吉康雄の足跡をたどるツアーが開催されます。

ツアー日程: 2015年8月4日~10日(岡山発着) 申し込み締切日: 7月3日(金)

お問い合わせ先: 福武コレクション国吉康雄プロジェクト Tel 086-207-2720 Mail info@yasuo-kuniyoshi-pj.com

# 京山から世界へ!つながる願い

岡山市立京山中学校

(平成25・26年度教育研究助成)

岡山市立京山中学校は徳山順子校長(取材時)のもと、地球的視野で未来を考え、地域のために社会貢献できる生徒を育てようと、「京山から世界の見える学校へ」をスローガンに、持続可能な社会の担い手として、未来をたくましく生きる国際人としての基礎を培う学習活動を進めています。教科横断的な単元学習プログラムもその一つで、実践事例のいくつかを紹介します。

1年生では、社会科で学んだアフリカのよさについて英語のコマーシャルを作成。ケニアやガーナの留学生の前で発表し、優秀作品をモザンビークの学校に送り、温かいメッセージをもらいました。

2年生では、英語科で“English Day”を設定。カンボジアやベトナム、イギリスなど13か国24名の留学生と英会話で文化交流をしたり、身近な環境問題を解決するための意見を出し合ったりしました。

3年生では、世界の食糧問題を解決するための行動指針を提案する学習プログラムを実践しました。まず道徳で日本人医師のドキュメンタリービデオを見て、国際的な諸問題と日本や自分との関わりを考える学習からスタートしました。美術科では1枚の報道写真(ハゲワシと少女)の鑑賞から貧困や食糧問題について討論。自分の考えを英語でスピーチしました。家庭科では食料自給率やフードマイレージを算出し、自分の食生活や地産地消について意見交換もしました。地域の農家の方や学校栄養士の話や、スーダンからのビデオメッセージなどを見て、最後にこれまで学習したことから自分のできることを英語で提案する発表会を行いました。多くの留学生からコメントを寄せてもらい、英語力や学習内容を確かなものとしていました。

グローバルな視点を生かした授業・活動を通して、思いやり・夢・志と共に育て合う学校づくりを進めることで、これからの中の未来を創る生徒の心の根っこを太くしたいという学校の熱い思いを感じました。



# ステージは地球

活動リポート

これからの時代をたくましく生きる子どもたちには、これまで以上に広い視野や強い意志、柔軟な思考や正しい判断力、積極的な態度等が求められています。それは世界を意識し、世界を知り、世界とつながることでより培われることでもあります。今回は、そのようなグローバル人材の育成に取り組んでいる2つの学校を取りました。(平山竜美)

# 錦鯉、世界を泳げ!

岡山県立津山商業高校

(平成26年度教育研究助成)

学校の玄関を入ると、正面の水槽の中で悠然と泳ぐ数匹の錦鯉が迎えてくれ、吉田信校長が「なかなかいいでしょう。生徒が丹精込めて育て上げたものです」と声をかけてくれました。

岡山県立津山商業高等学校は校は校は「自彌(じきょう)」の精神のもと、平成24年度から「グローバル人材育成プログラム～つしょう夢づくりプラン～」を設定し、より国際感覚を身に付けた地域の担い手としての人材育成を目指しています。

錦鯉は学校設定科目「ベンチャービジネス」に取り組む地域ビジネス科3年生が親鯉を交配し孵化させ、稚魚から大事に育てた商品です。学校ではこれまでに地元での生産・飼育・販売の体験学習を行ってきましたが、国際ビジネスというさらにもう一つ広いステージでの実践体験を積ませることで生徒の目を世界へ向けたいと考え、シンガポールでの錦鯉販売を学習に取り入れています。

生徒には販売先の文化や経済事情の調査研究、また輸出手続きの書類作成など、国内販売とは違った学習が必要です。さらに、顧客対応のための英会話も求められます。販売実習は希望の生徒が参加します。現地ではお客様との値引き交渉に圧倒されたり、突然のスコールに見舞われたりと、想定していた以上の出来事がありました。

しかし、生徒たちは一生懸命に説明をして販売できた時のうれしさを感じたり、鯉飼育の専門的な質問に英会話で苦労して応えたことや錦鯉という商品の価値観が日本とは全く異なるという文化に触れられたりしたことなど、戸惑いや感動や達成感に満たされた時間でした。さらに、国際感覚を身に付けた社会人としてこれから勉強することがたくさんあると感じた実習でした。

最後に吉田校長(取材時)は「社会には答えのないことがいっぱいです。答えのない問題を苦労して解き、自分なりに納得する答えを導き出す。津商の卒業生にはアイデンティティとアクティブとアイディアを持った、そんな社会人としての力量を高めてほしいと思います」と結びました。



助成対象者にはさまざまな人がいます。地域でユニークな活動をしている人、伝統や歴史を掘り起こしている人、地域資源に新しい価値をみつける人。この「FACE」ではそんな人々に会いに行きます。

## 「小さなカフェから地域づくりへ」



特定非営利活動法人 ENNOVA OKAYAMA 理事長

岡野英美

### 第11回みんなのテラコヤ ゲスト：吉岡秀人

日時：6月20日(土) 19:00～

会場：旧内山下小学校 体育館(予定)

内容：アジアの国々で無償で医療支援をしているジャパンハートの吉岡秀人氏の活動の話と、今を悩む若者へ働き方のヒントをもらう

入場料：1,500円

岡野英美／おかのひでみ

大分県国東市出身。岡山県立短期大学食物科卒業。1998年カナダへ語学留学。中国デザイン専門学校英会話非常勤講師を務めながら、2007年から pieni.ecole+cafe(教室とギャラリー)を主宰、2011年には pieni deux オープン。好奇心旺盛で学ぶことが好きな女性に人気。2014年12月特定非営利活動法人 ENNOVA OKAYAMA の理事長に就任。※平成25年度から3年継続で文化活動助成をしている団体です。

昨年の9月～12月、岡山市は岡山城を中心としたカルチャーボーンの魅力や回遊性の向上につながる社会実験を行いました。その実験の一つ、旧内山下小学校と石山公園を会場にした「ハイコーチャレンジ!!」の企画運営に取り組んだ特定非営利活動法人 ENNOVA OKAYAMA の理事長・岡野英美さんに会いに行きました。(和田広子)

大学進学をきっかけに岡山での暮らしが始めた岡野さん。卒業後は就職したものの本格的に英語の勉強がしたくて仕事を辞めてカナダへ留学。帰国後は英会話の講師を務める一方で、かつて後楽園の門前町として賑わった出石町で「pieni.ecole+cafe」(ピエニ)という小さな学校といいなギャラリー「pieni deux」を営んでいます。

2007年から始めた学校は、語学、楽器、料理、ダンス、ものづくり、部活など多彩で魅力的な40を超える教室がある大人の学び場です。2011年にオープンしたギャラリーは作家をはじめ美術学生の展示やコンテンポラリーダンスの公演など若い人たちの表現の場になっています。

pieni.を始めて4年目を迎えた頃、知り合いから ENNOVA OKAYAMA(エンノバ)の立ち上げに誘われました。活動拠点を城下界隈とし、30～40代の若者たちを中心に、人と地域を結ぶ「縁」をつくり、元になって旧内山下小学校の活用やその周辺地域を元気にしようという活動でした。自分にまちづくりができるのだろうかと悩んだのですが、メンバーが同世代だったこと、pieni.での経験を活かして地域の課題解決ができるならと手伝うことを決めたそうです。

「ハイコーチャレンジ!!」では ENNOVA OKAYAMA のメンバーとして、石山公園を舞台にフードやライブ、ワークショップが楽しめる「後楽の森と川バークマーケット」の開催、旧内山下小学校では「混浴温泉世界」や「国東半島アートプロジェクト」の総合ディレクター山出淳也さんをゲストに迎えた「山出サン晩餐缶」、幻の時間と空間を作り出す山猫団による「山猫音楽会アーリークリスマス編」、岡山のいいものを自分たちでセレクトして発信するニューウェーブなお土産屋「WE(ウイー)」を、公共空間というものを意識しながら手がけました。

3ヵ月にわたる「ハイコーチャレンジ!!」は約2万人が訪れました。「仕事との両立が大変だったけど、やりたいことを企画させてもらったので楽しかったです。」またやってほしい“楽しかった”と地域の方から言葉をかけてもらい充実感を得られました」と笑顔の岡野さん。

手探り状態で取り組んだ「ハイコーチャレンジ!!」ですが、この活動を通して自分たちが理想とする公共の場がみえてきたそうです。「若者が集まるようなおしゃれな場所だけど近くのおじいちゃん、おばあちゃんたちも気軽に遊びに来ることができる空間で、地域とのつながりを一番大事に考えている活動ができたらいいなと思っています。人と人、人と場をつなぐのが私の役割だとわかりました。」

肩肘張らず自然体で楽しみながら取り組んでいる活動が、結果的にまちづくりにつながっている—自然体から生まれるものを作ることで、柔軟なまちづくりが展開され始めています。



### 平成27年度の主なスケジュール

Month	Day	Event
5	25	機関誌「FUEKI vol.57」発刊
7	13	「学校でひらく舞台芸術教室」合同発表会 岡山市立朝日小学校と馬屋下小学校アーティストを派遣し、子どもたちと共に演劇やダンスの創作活動をした成果を発表します。
	20	福武哲彦教育賞・谷口澄夫教育奨励賞贈賞式(@岡山プラザホテル) 表彰及び受賞者による活動の発表。
8	2～8	教育研究助成贈呈式 平成27年度助成対象者に助成証書を贈呈。前年度助成対象者の活動成果を紹介。情報の交換や交流の場となります。
	29	プレ体験留学期間 オーストラリアの公立高等職業教育機関TAFE(Technical and Further Education)の職業教育・語学学習に触れるプレ体験留学行います。
9	25	文化活動助成贈呈式(@岡山プラザホテル) 平成27年度助成対象者に助成証書を贈呈。前年度助成対象者のステージ発表やパネル展示で活動成果を紹介。情報交換や交流の場となります。
10	23	機関誌「FUEKI vol.58」発刊
12	1	福武文化賞・福武文化奨励賞贈賞式(@Junko Fukutake Hall) 表彰及び受賞者による活動の発表。
1	11	平成28年度公募助成の申請開始 教育課題を解決するための調査、研究及び実践又文化芸術による地域の活性化を目指す活動を募集します。
	25	「ここに生きる、ここで創る」フォーラムvol.5 (@Junko Fukutake Hall) 教育・文化による創造的な地域づくりを目指す活動している方を迎えて毎年フォーラムを開催します。
		機関誌「FUEKI vol.59」発刊

※なお、日程は予定ですので変更になる場合があります。

※平成27年度の詳しい事業計画につきましては、当財團のホームページをご覧ください。

福武教育文化

検索

<http://www.fukutake.or.jp/ec/>

## お椀のバトン ——— 杉浦慶作

郷原漆器は蒜山高原の麓で約600年間継承され続けてきた、岡山県の重要無形民俗文化財指定の伝統工芸です。私はそこへと足を運び、本地師の方にお会いしました。精悍な顔つきからして見た目は30代後半くらい。数百年続く伝統をその若さで担われていることに少なからず驚かされました。

早速、私は彼の作業場で面白いものを発見しました。それは無造作に室内に置かれた30~40cm程度の高さで作られた木のスツールです。黒く光沢を抑えた漆塗装で仕上げられ、樽形の周囲は木の質感を残しながらも座る天面は滑らかに研磨され、大変座り心地も良い。そこに高度な技術が凝縮されていることは、私のような素人の目にも明らかです。

思わずその価格を尋ねてみましたが売り物ではないということ。理由を彼はそれを余技で作ったからだと言いました。それは余技と呼ぶにはあまりにも併まい美しい代物でした。

そこで100前に本地挽きされた小さな椀も見せてもらいました。100年前といえば大正時代まで遡ります。しかし、それは驚くほどありふれた形をしているのです。言い方を変えるならば、現代においてもなお通用する普遍的な定型を既にその時完成させていたということです。

完成されたものを繰り返し継続していくことは単調で創造性のない作業のように思えます。しかし、「変わらない」ということは決して停滞などではなく、「変える必要がない」ということなのかも知れません。そしてそれを保ち続けるには常に高い技術を必要とするのです。

ひとつの椀に込められた膨大な時間と職人の技術。600年もの時を経て受け継がれてきた伝統という名のバトン。そしてそれはいま、彼の手の中にあるのです。

すぎうらけいた／写真作家 1980年岡山県生まれ、津山市在住。平成17年に津山市へ帰郷以来、活動拠点を地元・津山とし、自然と人間の関係をテーマに制作を続けている。2008年「GEISAI MUSEUM#2」、ヴィクトービンチュック賞、「GEISAI #1」銅賞／2009年「氏賞選考作品展」大賞／2010年福武文化奨励賞



写真の人 高月国光「伝統は生きたものだ」

たかつきぐにみつ／木工 挽物 1976年倉敷市生まれ。石川県で挽物軋轆(ひきものろくろ)を学んだ後、真庭市蒜山に居を移し、郷原漆器の本地師となる。麻材料を活用した製品開発や後継者の育成、地元に漆や栗の植樹を進めるなど、土地と風土に合った郷原漆器の復興と技術伝承に努める。また、その技術と造型感覚は高く評価され、日本伝統工芸展においても各賞を受賞。「郷原漆器の館」館長。2008年福武文化奨励賞受賞。

## Editor's Column

4月より事務局長に就任した小川隆正です。岡山市出身、番町で生まれ、門田屋敷周辺で大学まで過ごしました。就職のため岡山を離れましたが、20数年前にベネッセコーポレーションに中途入社し定年まで勤めました。今までの経験、地縁、人脈を生かし、生まれ育った地域のために少しでも恩返しをしたいと思います。

初仕事は、米国出張。岡山の産官学の代表的な方々と国吉康雄氏とポートランド視察。岡山が更に魅力的な町になるための大きなきっかけになったと感じています。

趣味は音楽でジャンルは、ジャズやポップス系。バンドでキーボード、サックスを担当し、たまにライブもしています。今年からは家庭菜園づくりに初挑戦中です。前任の中野行雄事務局長(現常任理事)とタイプが違いますが、私らしく頑張る所存です。宜しくお願ひいたします。

機関誌

不<sub>イ</sub>易

F U E K I vol.57 2015.5.25 (次号は9月25日発行)

題名「不易」には、「時代を超えて優れたものに共通する本質的なもの」を大切にしたいという谷口澄夫初代理事長の思いが込められています。

編集・発行：

公益財團法人 福武教育文化振興財團

〒700-0807 岡山市北区南方3-7-17

株式会社ベネッセコーポレーション本社3F

TEL 086-221-5254 FAX 086-232-3190

URL <http://www.fukutake.or.jp/>

E-mail [eczaidan@fukutake.or.jp](mailto:eczaidan@fukutake.or.jp)

制作：

株式会社 吉備人

デザイン：

田中雄一郎(QUA DESIGN style)

印刷：

広和印刷株式会社



人づくり、地域づくりを応援します  
公益財團法人 福武教育文化振興財團